

シンドローム X, 死の四重奏, インスリン抵抗性症候群, マルチプルリスクファクター症候群, 内臓脂肪症候群などと呼ばれてきた生活習慣病や動脈硬化性疾患の元凶とされる病態が, ようやくメタボリックシンドロームという言葉に落ち着こうとしている。メタボリックシンドロームを正確に理解し, 理学療法がメタボリックシンドロームに対して何ができるのか, 今こそはっきりとした道筋を示す時が来た。メタボリックシンドロームに対する理学療法士の役割や実際の対応, 将来展望について, 臨床現場から教育現場まで最新の知見をまとめていただいた。

■メタボリックシンドロームとは(前田朝美, 他論文)

メタボリックシンドロームは内臓脂肪蓄積, インスリン抵抗性を病態の基盤とし, 内臓脂肪から分泌される種々のアディポサイトカインの関与により, 糖・脂質代謝異常, 血圧高値を発症する症候群で, 近年増加する生活習慣病, 動脈硬化性疾患の予防・対策において重要な疾患として注目されている。診断基準, 疾患概念が正しく理解され, 治療の基本である生活習慣の改善が浸透することにより, 効率的に動脈硬化性疾患予防がなされることが期待される。

■メタボリックシンドロームに対する理学療法の現状と課題(石黒友康論文)

メタボリックシンドロームの有病者は1,960万人と推定されている。本症の予防や, 改善に運動療法が有効であることは多くの研究により明らかにされ, 「健康日本21」においても運動の重要性が指摘されている。理学療法は制度的に疾病予防を目的としていないが, 運動療法を専門とする理学療法士として, 本施策にどのように関わっていくかは, これからの理学療法士の方向性を定める1つのポイントとなることが予想される。

ケースレポート

■1. メタボリックシンドロームを伴う脳血管疾患に対する理学療法(平木幸治論文)

脳血管疾患は一度発症していることから, すでにハイリスクな状態にあり, 二次予防(再発予防)は一次予防の場合より厳格に危険因子を管理する必要がある。生活習慣病が増加している昨今, 理学療法士は脳血管疾患の二次予防を主眼に入れたアプローチも考慮するべきである。本稿では, 二次予防を目的として理学療法を施行したメタボリックシンドローム合併脳梗塞症例を提示し, その経過とアプローチ法について述べる。

■2. メタボリックシンドロームを伴う心疾患に対する理学療法(齊藤正和論文)

メタボリックシンドロームは心血管イベント発症の危険因子である。また, 既に心疾患を有する患者では, メタボリックシンドロームの是正が2次予防における重要な課題である。そのため, メタボリックシンドロームを伴う心疾患患者では, 運動療法による運動耐容能やADLの向上に加えて, 食事療法, 薬物療法, 禁煙, ストレス軽減などを含めた包括的リハビリテーションおよび生活習慣の是正が極めて重要となる。

■3. メタボリックシンドロームを伴う運動器疾患に対する理学療法(横地正裕論文)

メタボリックシンドローム, 2型糖尿病などの代謝疾患を中心とした生活習慣病を伴う運動器疾患患者の中には, 生活習慣病が症状増悪, 治療障害, およびリスク増大因子となっている症例がみられる。当院では, そのような症例に対し生活習慣病サポートチームによる介入を実施している。本論文では, メタボリックシンドロームを伴う変形性股・膝関節症例を通して, 理学療法介入を含めたチーム介入の内容と有効性について述べる。

■4. メタボリックシンドロームに対する生活習慣の修正への理学療法士の関わり(井垣 誠, 他論文)

当院の運動療法の取り組みにおける理学療法士の役割は, 運動療法の教育に加え, リスク管理, 集団指導, 運動器障害への対応など幅広いものである。特に, 理学療法室を利用した継続的な通院による運動療法を可能にしたことが特徴である。そして, 本取り組みの中で定期的に運動療法を実行できた患者については, 確実にメタボリックシンドロームに関する臨床データの改善が得られた。運動療法を継続させるためには, チームとしての対応や様々な工夫が必要である。

■5. メタボリックシンドロームに対する理学療法士養成校での教育の実践(大平雅美論文)

メタボリックシンドロームに対する介入は, 理学療法の対象として最も多い脳血管障害など動脈硬化性疾患の予防につながると期待されている。しかし, 理学療法士を目指す学生にその学習を促す養成校側の準備は整っていない。本稿では, 現行のカリキュラム, 限られた時間の中で, 学生にメタボリックシンドローム発症予防における「運動」の重要性を伝え, 関心を抱かせる工夫と今後の課題を, ここ数年の取り組みを通して提示した。